

中学校家庭科における幼児とのふれ合い体験の教育的効果をどのように高めていくのか：アクションリサーチによる検討

鎌野育代¹⁾ 伊藤葉子^{2)*}

¹⁾千葉大学教育学部附属中学校 ²⁾千葉大学教育学部

Educational Effectiveness in Early Childhood Education and Care: Action Research in Junior High School Home Economics

KAMANO Ikuyo¹⁾ ITO Yoko^{2)*}

¹⁾Attached Junior High School of Education, Chiba University ²⁾Faculty of Education, Chiba University

本研究は、中学校家庭科における幼児とのふれ合い体験の教育的効果を高めるための実践的な知見を得るための手立てを検討することを目的とし、7名の家庭科教諭と1名の大学教員による約1年間のアクションリサーチによって、この手立ての開発と教育的効果の検討をおこなった。

まず、カリキュラム作成において、幼児とのふれ合い体験を前半に実施する場合と後半に実施する場合の指導計画および保育施設側との連携の留意点を集約した。次に、事前・事後指導におけるガイドラインの作成とワークシートなどの具体的な教具の開発をおこなった。また、他教科との連携として、総合的な学習の時間に実施している職業体験からつなげる実践や、家庭科学習のなかで、家族学習へ展開する実践も検討した。

これらの手立ての教育的効果については、幼児との関わり方において、幼児の自主性を尊重する視点や教育的な配慮をする視点などが加わるという生徒たちの変容から、その教育的効果が確認された。

This research is aimed to develop practical methods for enhancing the effectiveness of the experience in early childhood education and care (ECEC) in middle high school Home Economics. In this research, some specific methods were developed and the effectiveness was examined through Action Research for about 1 year.

First, we designed some distinctive curriculums, one of which is for the first half and another for the latter half. Guidelines were mapped out for the pre-programs and the post-programs of ECEC, respectively. In addition, we developed some materials including the work sheets. Trial programs following Career Experience in Period for Integrated Study were developed, and so were other trial programs followed by Family Education in Home Economics Study.

It revealed that through those programs middle high school students made good progress in their social skill including skill in caring for children and teaching them.

キーワード：幼児とのふれ合い体験 (Experience in Early Childhood Education and Care)

アクションリサーチ (Action Research) 家庭科 (Home Economics)

保育学習 (Child Care Education) 中学生 (Middle High School Student)

1 問題の所在

「幼児とのふれ合い体験」は、小・中・高校において、さまざまな形態において実施されている。文部科学省生涯学習政策局男女共同参画学習課および厚生労働省雇用均等・児童家庭局育成環境課による全国規模の「乳幼児と年長児童の交流状況調査」報告書(2004および2005年度実施についての調査)¹⁾によると、小・中・高校においては3割前後の実施実績が報告されており、その詳細をみると、教科としては、総合的な学習が最も多く、次いで家庭科(中学校では技術・技術)であった。なお、この全国規模の調査とは別に東京都が独自に実施した体験

に関する調査結果²⁾から、総合的な学習においては職業体験という趣旨で実施されているものが最も多いことが示されている。

千葉市の中学校・千葉県の高校における2004・2005年度の「幼児とのふれ合い体験」の調査結果では³⁾、家庭科において、中学校では、必修科目では50～60%が実施しているのに対し、高校では必修科目および選択科目において数%しか実施していなかった。一方、職業体験は中学校では、90%前後の学校が総合的な学習で実施しており、高校は中学と比べると少ないが、総合的な学習では15%程度の学校が実施しており、教科外での職業体験の実施率は、40～50%であった。ボランティア体験については、中・高校とも15～20%の範囲内での実施が報告された。

これらの調査結果は、職業体験としての「幼児とのふ

*連絡先著者：伊藤葉子

*ITO Yoko

れ合い体験」の実施数が多いことを示している。ただし、職業体験として幼児とふれ合う体験が増えることで、家庭科の幼児とのふれ合い体験の必要性が減じるというわけではないと考える。その理由として、職業体験では、将来の進路として、保育関係の職種を希望する生徒だけに限られた体験になってしまうこと、必ずしも、全ての生徒たちが（乳）幼児の発達や生活に関する知識を身につけることに結びつかないということが挙げられる。

2 研究の目的

以上のように、家庭科における「幼児とのふれ合い体験」は、全ての生徒たちを対象にしており、（乳）幼児の発達や生活を学ぶ学習の一環として位置づけられるところに教育的意義を有していると言える。また、戦後一貫して中・高校生への保育教育を担ってきたのは家庭科であり、「幼児とのふれ合い体験」についても、多くの意欲的な教師による実績が積み重ねられてきており、その成果に関する研究も発表されている^{4)~8)}。

特に、平成10年告示の中学校学習指導要領⁹⁾では、技術・家庭科の家庭分野において「幼稚園や保育所等で幼児とのふれ合いができるように留意すること」、平成11年告示の高等学校学習指導要領¹⁰⁾の家庭科において「幼稚園や保育所等の乳幼児、近隣の小学校の低学年の児童等とのふれ合いや交流の機会をもつ」という文言が明記され、さらに「幼児とのふれ合い体験」が推進されるようになってきている。

そこで、本論では、最も実施率の高い中学校家庭科における「幼児とのふれ合い体験」に絞り、その教育的効果を高めることを指標にして、実践的な知見を示していくことを目的とする。

3 アクションリサーチの概要

「幼児とのふれ合い体験」の教育的効果を高めるための実践的な知見という意味は、教師にとって自分の家庭科の授業のなかで生かしていけるような手立てを示していくことだと捉えられる。また、その手立てによって、生徒たちがどのような内面的変容を示すのかという教育的効果を明らかにしていくことによって、その手立ての有効性を示すことも必要だと考える。

以上のような趣旨に基づき、本研究では、アクションリサーチによって、「幼児とのふれ合い体験の教育的効果を高めるための手立てとその有効性の検討」を進めた。教育において、アクションリサーチという用語は、広義には、教師が授業を進めながら自分の授業への省察とそれに基づく実践を繰り返すことによって、次第に授業を改善してゆく授業研究の総称として捉えられるが、具体的には、4ステップPlan（計画）→Act（行為）→Observe（観察）→Reflect（省察）から成るサイクルを螺旋的に発展させていく形態で進められることが¹¹⁾¹²⁾多い。つまり、授業の改善を目指したアクションリサーチを共同でおこなう際には、共通の課題をみつけ、課題への取り組み（Plan）をそれぞれの授業の中で実践（Act）し、その様子を観察（Observe）し、省察（Reflect）した上で、

新たな取り組みを考えていくことを繰り返すということである。

以下、本研究におけるアクションリサーチの概要を示す。

- ・共通の課題：幼児とのふれ合い体験の教育的効果を高めるための手立ての検討
- ・メンバー：千葉市立中学校家庭科教諭7名と大学教員
- ・期間：（2006年4月～2007年3月実施）

なお、今回のアクションリサーチは、課題への一つの取り組み（以降、目的に対応して手立てと表す）に関するサイクルが終了してから、次の手立てを計画するという方式ではなく、複数の手立てを計画し、1年間の保育学習のなかで適宜実践しながら、複合的にサイクルを発展させるという形態をとった。そこで、各手立ての観察や省察から得られた知見を集約することで、「幼児とのふれ合い体験の教育的効果を高めるための手立て」を提示し、「その手立てによる生徒たちの内面的な変容」という視点からの教育的効果の検討を進めることとする。

4 幼児とのふれ合い体験の教育的効果を高めるための手立ての検討

4-1 保育学習における「幼児とのふれ合い体験」の位置づけ

具体的な手立てを決める際に、まず、個々の教師が日頃感じている問題点を出し合った。まず、最初に出されたのは、カリキュラムという全体の枠組みのなかでの幼児とのふれ合い体験の位置づけである。

この問題点については、各教師がこれまでの保育学習の経験をもとに意見交換し、保育学習の前半部分で実施する場合と後半で実施する場合とに大別し、それぞれのカリキュラム上の留意点を集約した。その内容を図1に示す。これらの意見交換のなかで、幼児とのふれ合い体験の位置づけに関しては、受け入れ側からとの連携をはかることが重要であるという共通認識が得られたため、連携のための手続きについても集約した（図2）。

4-2 「幼児とのふれ合い体験」の事前・事後指導

ふれ合い体験の教育的効果を高めるためには、事前・事後指導が重要であることも意見交換の中で共通認識された。その指針ともいべき視点を示す。

4-2-1 事前指導について

- ① 安全性について具体的・実践的に学ぶ
 - ・具体的な遊びの場面のなかでの幼児への対応を演じてみるなど、実践的に安全について学ぶ
 - ・幼児は中・高校生がくるだけでうれしくて興奮してしまうこと、その状況において、喜ばせたい一心で子どもをより興奮させてしまうことによって事故がおこりやすいことを理解させる
- ② 危険性について各自で考える
 - ・危険性について、自分で考えさせる。たとえば、なぜ腕をもって引っ張るのがいけないのかを考えさせることでわかったことを応用して、生徒たちは同じような危険性のある行動をしないように、個々に考えて行動できるようにする。

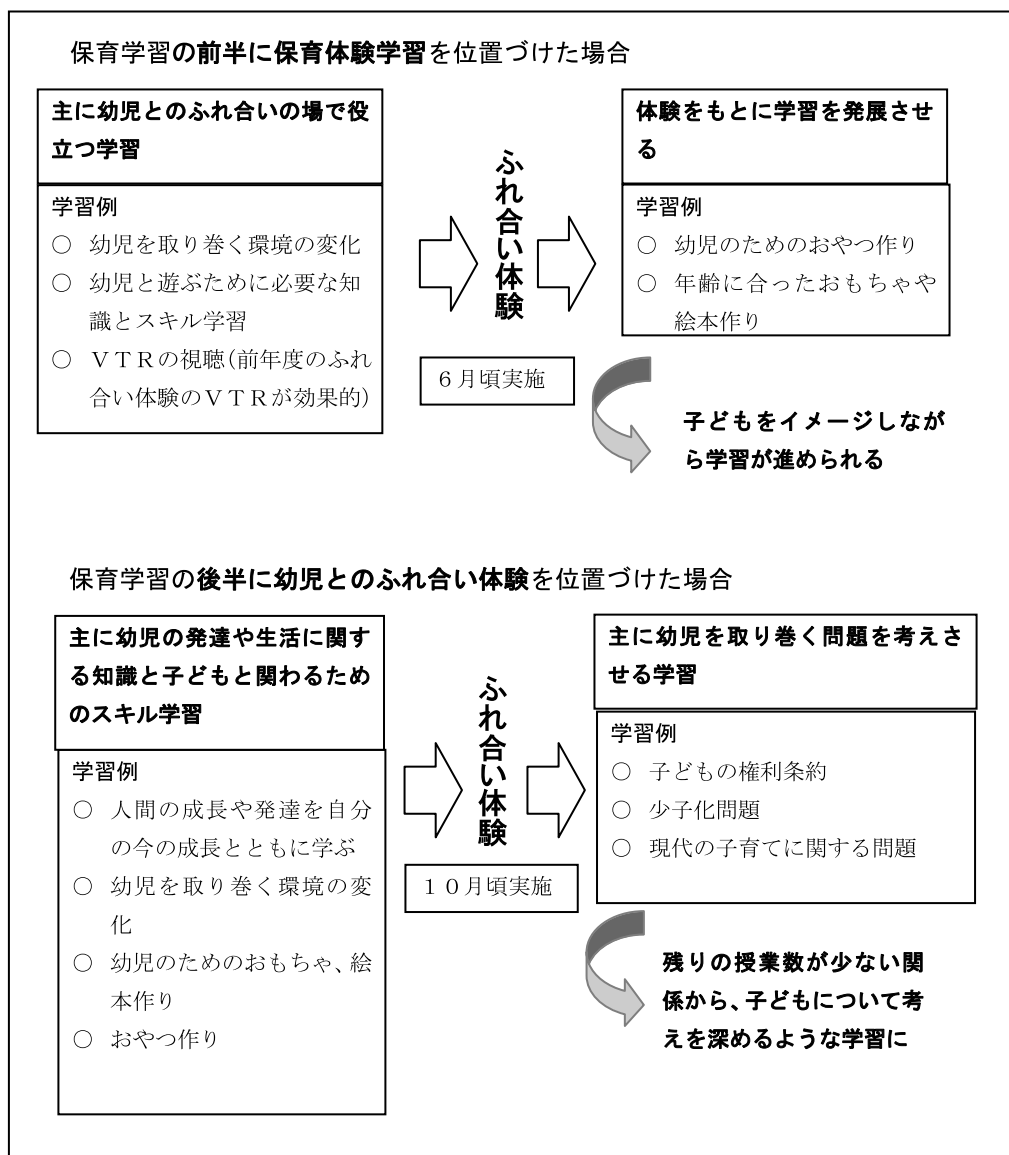


図1 保育学習における幼児とのふれ合いの位置づけ

- ・ 幼児が遊んでいる場面や、幼稚園や保育所の施設の写真やイラストを使って、様々な場所や場面での危険性を具体的に理解させる。
- ③ 保育施設と安全指導の連携をはかる
 - ・ あらかじめ、保育施設に安全指導のポイントを聞いておく。
 - ・ 各保育施設で安全指導の方針が異なっている場合があるので(例：肩車は全面禁止の場合もあれば、幼児の足もち、幼児は中・高校生の目を隠さないように頭に手をやる等の条件つきでOKの場合もある)、細やかな打ち合わせをする。
- ④ 幼児にとって楽しい体験にする
 - ・ 中・高校生が、自分たちが普段している言葉使いや行動を幼児の世界へそのまま持ち込まないように、幼児の世界に入っていき姿勢をもたせるようにする。
- ⑤ 中・高校生にとって楽しい体験にする
 - ・ 中・高校生が保育施設において、関わり方を例示(子どもが遊んでいるのを手助けする関わり・同じ遊びをする関わり・ルールのある遊びに加わる関わり

り等)することによって、幼児と遊べるような準備をしていく。

4-2-2 事後指導について

- ① 幼児のとらえ方に対する変化を自覚させる
 - ・ 幼児という存在への捉え方の変化を自覚のために、体験前後の幼児と遊ぶ体験に対する気持ちの変化・幼児に対するイメージの変化・体験のなかで印象に残っている場面とその理由などを言語化させる。
- ② 体験で学んだことを言葉にし、価値づけする
 - ・ 子どもの生活や発達を学んだことを意識化させるために、例えばある場面での子どもとの関わりを取り出し、生徒なりの言葉で表わすようにする。
 - ・ 自分の体験の新たに価値づけのために、仲間や教師に話したり、仲間の体験を聞いたり、体験の意味を新しい視点からとらえるために教師からアドバイスをもらう。
- ③ 生徒が新しい自分と出会う支援をする
 - ・ 教師自身が、生徒たちの個々の多様な体験の意味を引き出す力、読み取っていく力を備えていく。

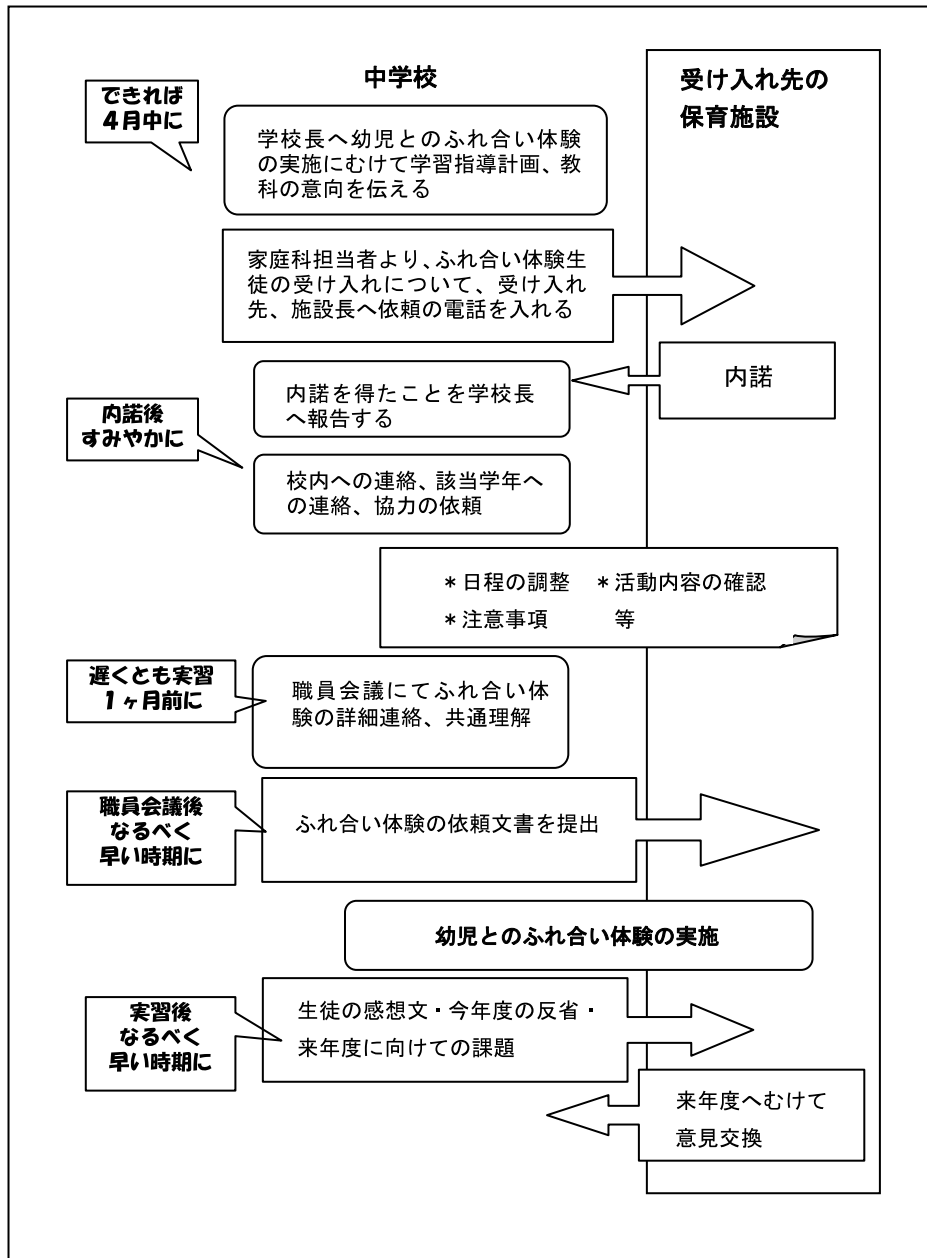


図2 保育施設との連携のための手続き

- ④ 教師が個々の生徒をとらえ直す
 ・ 普段の教室内の教師の目線の高さを変えて、個々の生徒をとらえ直すことができるように、生徒の目線の高さで個々の体験を捉える。

4-2-3 事前・事後指導例

今回のアクションリサーチにおいて、取り組まれた事前・事後指導例を以下に示す。

- ① 例1 事前指導において、新聞紙を大量に用意し、実際に生徒たちに思い切り遊ばせる時間を設定する
- ② 例2 事前指導において、ある中学生の1日の生活時間とある幼児の1日の生活時間を比較し、生活面からの発達段階の違いを具体的に理解させる
- ③ 例3 事前指導において、訪問前に目標（ふれ合い体験でどんなことを知りたいのか）をワークシートに書き、保育施設側にもそのワークシートを見せておく。事後指導においては、体験後に目標に対する振り返り

を記入させ、もっと知りたいことも書く。このワークシートを保育施設にもっていき、保育士が手分けして生徒一人一人に返事や感想を書いてもらう。なお、保育士が書いた内容の概要を表1に集約した。

- ④ 例4 事前指導で、ワークシートに幼児を喜ばせること、役にたつこと、マイナスになることを予想させておき、事後指導で体験後に、再びワークシートに同様のことを記入させ、体験前のワークシートに書いた内容と比較して、幼児への捉え方がどのように変化したのかを生徒自身が自覚できるようにする

4-3 幼児とのふれ合い体験の他教科との連携や教科内での発展

家庭科の授業のなかでの幼児とのふれ合い体験は、授業数や教員の負担などの面から、1回だけの体験に終わる場合が多いが、幼児とのふれ合い体験を2回実施した

表1 保育士さん達からのコメントが果たす役割

コメントの果たす役割	生徒の記入内容例	保育士のコメント例
訪問前の不安な気持ちを受け止める	訪問前は、子どもとめったにあったり、遊んだりしなかったし、子どもはあまり好きではなく面倒だと思った	正直な気持ちですよ。でも、子どもは知れば知るほどかわいいんですよ。面倒なところもありますが、それはすべて私たち大人やあなたたちが通ってきた道です。だから、ひとりひとりを大切にしてくださいね
生徒の気づきを肯定的に評価する	小さい子には、目の高さをあわせ話すと声もよく聞こえ、表情もよく見えて、小さい子が何を伝えたいのか、よくわかった	すごいことに気がつきましたね。保育士の一番、大切なことだと思います。子どもの気持ちに近づくことが、子どもを理解する第一歩です。こんな風に接してくれて、どうもありがとうございました
生徒の気づきをもとに、関連の知識を足していく	最初の頃は、電気で遊ぶものが好きそうだったけど、実際にあそんだり、様子をみたりすると、いちよの葉でたのしそに遊んだり、かけっこなど、体を動かす遊び、自然にふれる遊びで、とても楽しそうだった	たのしいお散歩だったようですね。子どもたちは、お散歩が大好きです。「新しい発見」にはもってこいの活動です。同じコースを違う時期に通ると、「先生、たけの子大きくなった」「葉っぱ黄色くなったよ」などと興味深そうに知らせてくれます
	2・3人のグループと大人数のグループという2種類にわかれることがわかった	年齢によって、大勢で遊べたり、ひとりで遊ぶのが楽しかったりと違いがありますね、小さな子は、ひとりでじっくり遊ぶことを好みます。5・6歳児は、かなりの大人数で遊べるようになり、また、ルールのあるドッチボールのような遊びの楽しさがわかるようになります
生徒の疑問に回答し、幼児への関わり方にアドバイスを与える	砂場遊びは、人気があるのは、なぜか知りたいと思う	砂はこわれても、こわしても、また、つくりあげることができるので、子どもたちは大好きですね
	小さい子どもが言うことをきかないときは、どうすればいいのだろうか？	どうしてなのか、原因をみつけてあげて気持ちを聞いてあげてね。けんかなどの場合には、おたがいの気持ちをきいてあげてください。そして、仲立ちをして、また一緒に遊べるようにしてあげられるといいですよ。でも、自分ひとりでは難しいなあと思ったら、遠慮なく保育士さんをよんで、一緒に解決しましょうね

経験を有する教師からは、その重要性が強く主張された。そこで、上述したように、現在、ほとんどの千葉市立中学校において実施されている総合的な学習における職業体験との連携を検討した。具体的には、保育関係の職種における体験を希望した生徒においては、家庭科のふれ合い体験へつなげるという連携をはかるという手立てを検討するということである。

一方では、家庭科という教科のなかでの保育学習でのふれ合い体験の発展の模索という問題点も出された。その一つに、家族学習への発展という方向性が提示され、その教育的効果を高める一つの手立てとして検討する必要性が共通認識された。今回のアクションリサーチにおいては、図3に示すように保育学習から家族学習へ展開するという形態の授業実践例が提案された。

5 幼児とのふれ合い体験による生徒たちの内面的な変容

5-1 事前・事後指導のなかで見られた生徒たちの内面的な変容

本報では、紙面の都合上、上記4-2の事前・事後指導例の中から例4における事前・事後指導において見られた生徒たちの内面的な変容について報告する。

生徒たちの内面的な変容は、事前・事後指導で用いたワークシートのなかの記述をもとに、以下の三つの行動として集約できた。

① 幼児の手助けをする行動

体験前には、多くの生徒が、幼児の手助けをすることは役にたつ行動として捉えていたが、体験後には、「幼児は助けてあげるだけではいいとは限らない」という意味の振り返りが書かれている記述が目立った。特に、「本当にこまっている子だけ手助けをする。なんでもか

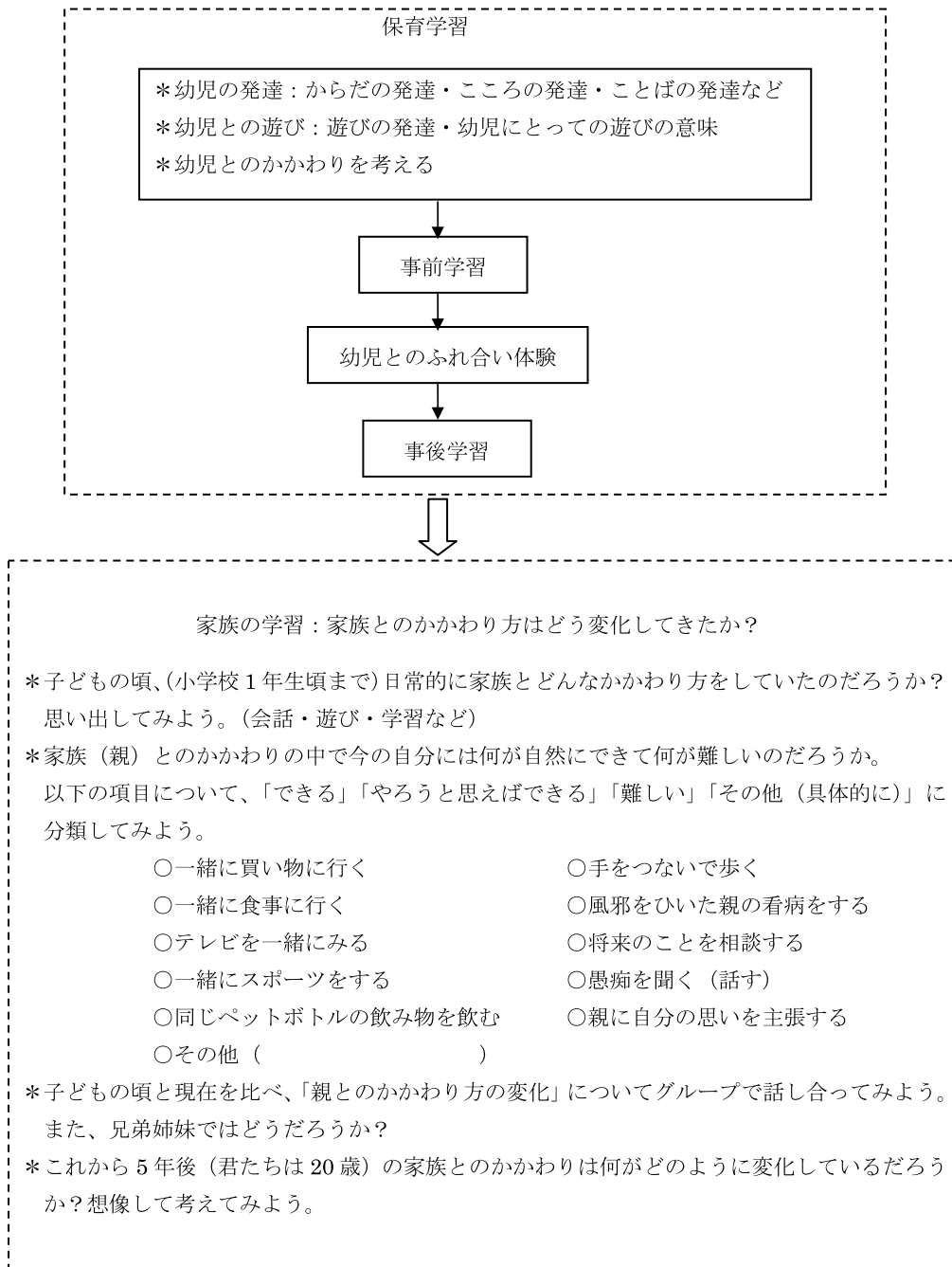


図3 保育学習から家族学習へ展開する実践例

んでも手助けするのは、その子のためにならない」という記述からは、生徒たちが、安易に手助けをすることで幼児にもたらす影響についても考えられたと言える。つまり、幼児と関わる際に、自主的な意志を尊重することの重要性に気づいたことを表している。

② 様子をよくみる行動

様子をよくみる行動は、体験前はマイナスの行動だと捉える傾向が強かった。これは、幼児と関わらず、遊ばないという意味合いで否定的に考えていたようである。しかし、体験後は、「生徒同士で幼児をみて笑ったり、他人のように冷ややかにみるというのはよくない」という記述が示しているように、より状況を限定して否定的な捉え方が変わらない場合と、「幼児が何をしているのか、どんな関わりが必要なのかをよくみてから接するこ

とが大事」という表現にみられるように、文脈のなかで観察するも時には必要であるという捉え方に変わる場合にわかれた。

③ 抱っこ・肩車をする行動

抱っこ・肩車をする行動は、体験前には「幼児が喜ぶだろう」という肯定的な見方と「危険だからやめたほうがいい」という否定的な見方があった。体験後も、「幼児がとても喜んでくれた」と直接的な接触のなかで活動的な関わりができたことに満足した感想をもつ生徒も多かった一方、「幼児とのふれ合いには、全体とのバランスも必要」と冷静な判断をもてるようになった生徒もいた。後者については、「順番を守らない子がいて逆にけんかになってしまった」「ひとりにやると周りの子がみんなやりたがり、時間の関係で全員できなくなってしま

う」というように、全体のバランスを考えると単に幼児の喜ぶ姿だけで判断できないという点に気づいたことを表している。これは、集団のなかの幼児と関わるという体験によって、公平にふれあうことの難しさを知ったとも言い換えることができる。

5-2 幼児とのふれ合い体験を2回実施した場合の生徒たちの内面的な変容

ここでは、4-3の総合的な学習における職業体験からつなげていくという手立てにおける生徒たちの内面的な変容について述べる。2年次で保育関係の職種の職業体験として保育施設での幼児とのふれ合い体験をおこなった生徒たちに、3年次の家庭科の保育学習でのふれ合い体験後にインタビューを実施した結果、以下の3点の変容に集約できた。

① 自分から幼児との関わり合いをスタートさせること
ここで生徒が実際に語ったことは「幼児たちは自分たちの世界をつくって遊んでいるから、幼児の世界へ自分から入って行かなきゃだめだなと思った。」「遊びになっていない遊びもなぜか二日目はやってみた。」といったものであった。つまり、二回目のふれ合い学習では、中学生の方から、幼児への働きかけをする、もしくは幼児の世界へ自分を変化させ入ろうとする姿勢が表れるということが示された。

② いい意味で、遠慮しなくてもいい存在として幼児を捉えること

幼児との二回目のふれ合い学習の中では「時には怒ることも大切だし、注意することも大切なんだ」「そこまで甘やかすってことはしなくてもいいんだ。時にはクールさも必要」というように、幼児といっても、しっかりと自分というものをもった存在で、幼児が自己中心的であったりわがままな言動があった場合は、注意したり、いけないことを教えたりといった、幼児より少し上の立場に立って判断し行動することの重要性に生徒は気づいていくということがわかった。

③ 幼児から自分がどうみられるかを意識したこと

実際の生徒の言葉としては「みんなが自分のまねをするからやっぱり下手なことはできない」「あんまりふざけすぎてだめな人だなんて思われないように意識した」であった。二回にわたる幼児との関わりを通して、幼児の前では自分の立場を考えた言動を心がけたり、幼児との関係性の中での自分を知り、自分で自分をコントロールする生徒もいるということが示された。これは、教育的な配慮の芽生えと言える。生徒たちが、体験を通して、自分たちは幼児にとっては教育的な存在であるということを学んだことを示している。

6 まとめと今後の課題

本研究では、中学校家庭科における「幼児とのふれ合い体験」の教育的効果を高めるための授業における手立てを開発した。それらの手立てを用いたことによって、生徒たちの幼児への捉え方や関わり方が変容したことが明らかになり、その有効性が実証された。また、本研究の意義は、開発された手立てや具体的な教具だけにとど

まらず、約1年間をかけたアクションリサーチを通して、参加した中学校の家庭科教諭が、保育学習が目指すものは何なのか、その目標からみた時にこれまでの指導計画で良いのかという視座から、それぞれの授業を振り返る機会を持てたことでもある。言い換えれば、手立てを検討し、その有効性を生徒の内面的な変容から追うというプロセス自体が、教育評価という役割を果たしたということになる。

本研究では、それらの手立てを用いた場合と用いない場合を比較するなどの仮説検証的な手続きをとったわけではないので、その有効性を厳密に検証したとは言えないが、アクションリサーチは、本来、教師の成長を目指したものであり、教育研究として実践的な知見を得るという立場から、成果を評価するべきだと考えている。

課題としては、ふれ合い体験を2回実施することの教育的効果が高いことが示されていながらも、その実施が難しいという現状を打破する方略を探していくことが挙げられる。また、保育施設との連携を深めるためには、個々の教師が受け入れ側の理解を求めめるために意思疎通をはかるというレベルの努力だけではなく、学問レベルにおいて、家庭科教育と保育学が、この問題に関して研究交流を深めていくという努力が必要だと感じた。

謝 辞

本研究において、アクションリサーチに参加してくださった千葉市立椿森中学校家庭科教諭 山田久恵先生、みつわ台中学校 豊川ますみ先生、越智中学校 横山由佳子先生、小中台中学校教諭 佐々聡子先生、緑町中学校 小原真希子先生、天戸中学校 元野千春先生にお礼申し上げます。

引用文献

- 1) 文部科学省生涯学習政策局男女共同参画学習課および厚生労働省雇用均等・児童家庭局育成環境課：乳幼児と年長児童の交流状況調査報告書、(2006)
- 2) 東京都教育委員会：平成17年度 教育課程の編成・実施状況〔公立幼稚園・小学校・中学校〕、(2006)
- 3) 伊藤葉子：中・高校生の家庭科の保育体験学習の教育的課題に関する検討、日本家政学会誌58(6)、315-326、(2007)
- 4) 室雅子：中学・高校での乳幼児の接触体験と保育教育の果たす役割、家庭教育研究所紀要21、75-85、(1999)
- 5) 藤後悦子：高校の「保育」体験学習を通しての子どもイメージの変化、家庭教育研究所紀要23、108-118、(2001)
- 6) 中嶋明子・砂上史子・日景弥生・盛玲子：高校家庭科における保育体験学習者の意識変容(第1報)、日本家庭科教育学会誌46(4)、351-361、(2004)
- 7) 砂上史子・日景弥生・中嶋明子・盛玲子：高校家庭科における保育体験学習者の意識変容(第2報)、日本家庭科教育学会誌48(1)、10-21、(2005)
- 8) 伊藤葉子：中・高校生の親性準備性の発達と保育体

- 験学習, 風間書房, 25-29, (2006)
- 9) 文部省：中学校学習指導要領平成10年告示, (1998)
- 10) 文部省：高校学校学習指導要領平成11年告示, (1999)
- 11) McKernan, J. 『Curriculum Action Research』 Kogan Page p 3-34, (1991)
- 12) Kemmis, S. & McTaggart, R., 『The Action Research Planner』 Deakin University ,p 5-28, (1992)